

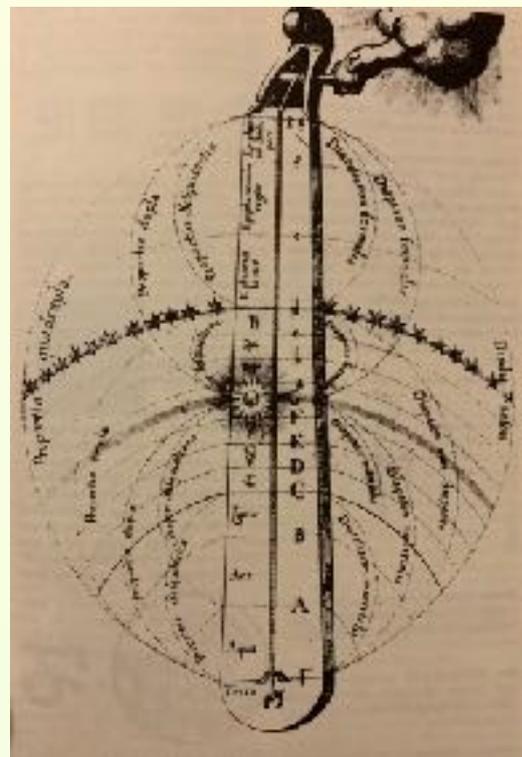
『今』を聴き『今』を歌うこと

日時： **8月17日（日）** 11時45分～13時

於： 東京久が原集会所

今年も音楽家の吉田和彦さんをお呼びして、音楽講座・体験の時間をもちたいと思います。テーマは「今」です。吉田さんに新しく作曲いただいた聖霊降臨祭とヨハネ祭の聖歌の、お披露目と作曲者解説もあります。

講座の後、14時前まで吉田さんを囲んで食事する時間を持ちます。お時間ある方は遠慮なくご参加ください。



講師より

20世紀の初頭以降音楽は実に異なる様相を呈し、一言に音楽と言っても人々がその言葉から受ける感情やそれについての理解も実に様々です。その20世紀初頭までの演奏会ではその時代に生きる作曲家の作品がプログラムの殆どを占めていましたが、現在では100年前どころか200年も300年も前の音楽がプログラムの殆どを占めています。音楽に限らず芸術というものは、各時代の人間社会に影響を及ぼす精神的なものを音や色や形を通してこの地上で具現化したものであるべき筈ですが、今ではその芸術という名の下に享楽や娯楽が紛れ込んでしまい、その境が見失なわれているのが現実です。特に私たちキリスト者共同体の儀式音楽や聖歌について考える時、先ずは目覚めた感覚でそれについての認識を研ぎ澄まし、宗教改新運動の中でそれらが未来の為にどの方向へ進んでいかなければならないのかという問いに常に向かい合うことが大切です。

その昔、礼拝の中で聖歌はユニゾン（一声）で歌われていましたが、厳密な意味での作曲者というものは存在せず、聖職者と音楽家は一体でした。そこから音楽的な仕事が徐々に宗教的な本質から離れ出して専門化していく過程で聖歌も二声に分かれて歌われる様になりました。これを音楽的な発展として肯定的に捉えるか、天界と地上界の分離として悲観的に捉えるかは自由ですが、キリスト者共同体が私たち一人一人の意志を以てどこへ進んで行くべきかを考える時、人間聖化式に相応しい聖歌のあり方と言うものが自ずと浮かんでくるのではないのでしょうか？

複数の人間が同時に喋る時、リズムを揃えることは出来ませんが声を揃えることは出来ません。しかし『歌』ではそれが可能です。礼拝の中で私たちが互いに想いを寄せてユニゾンで歌うことにより、共同体としての感謝を香の煙に乗せて神へと届けることが可能となります。またパンとワインを授かりキリストの命の流れを内に感じる事ができた時、その鼓動が重なり合いながら歌が鳴り響きます。聖歌が鳴り響く瞬間は天界にいる存在と地上界にいる私たち人間がお互いに向き合って結びつくことの出来る大切な瞬間です。その時に私たちが上手い・下手に関わらず、どのような姿勢で共に歌う事が可能か、それをこの夏も探りたいと思います。

吉田 和彦

来日されている吉田さんは大阪集会でも講座を持たれます。裏面をご覧ください。

キリスト者共同体 夏の音楽講座

未来から聴く

日時： **8月30日（土）** 15時15分～19時過ぎ

8月31日（日） 9時過ぎ～13時

於： 大阪集会阿倍野集会所

大阪集会に吉田和彦氏を迎えて初めて行う音楽講座です。

キリスト者共同体の活動の中心にある人間聖化式をともに行う人間の集まりは、地縁・血縁という過去からの流れによって作られる共同体ではありません。未来からの流れによって生まれる新しい共同体とはどのようなものなのか？

人間の中から響かせる聖歌を通して、より意識的に参列する人間聖化式から、その予感を共有できる機会となれば幸いです。

第一日： 8月30日（土） 15時（14時半受付開始）～19時過ぎまで

自己紹介、発声練習、聖歌練習、レクチャー（20世紀初頭の音楽変遷とルドルフ・シュタイナーの音楽衝動について）、人間聖化式の音楽と聖歌の練習

第二日： 8月31日（日） 9時過ぎ～13時まで

人間聖化式の前に約1時間、人間聖化式の音楽と聖歌の練習

10時半から人間聖化式、その後に質疑応答や意見交換

～講座終了後、お時間ある方は一緒に昼食を～

- ・定員25名（7月31日迄に申込みされた方を優先させていただきます）
 - ・申込先(下河辺): Email : untenneben@yahoo.co.jp 電話 : 090-4027-1766
 - ※ 楽器を持参できる方は、お申込みの際、楽器の種類をお知らせください。
 - ・講座参加費 3,000円（ご相談に応じます）
- それ以外の共同体への自由なご寄付も有難くお受けします。

講師からのメッセージ：

『歌う者は倍祈ることになる』と聖アウグスティヌスも語っているように礼拝において歌うことは昔から常に重要でした。聖歌が鳴り響く時、そこに共同体として祈ることの意味が集約されていると言っても過言ではありません。しかしキリスト者共同体ではそこに留まることなく参列者がひとつの大きな耳となって儀式そのものを聴き、それを音楽的に表現することへの努力が絶えず為されてきました。そこで聴くべきものは過ぎた時代に創造された音楽ではなく、今を生きる私たちに未来から語りかけてくるもの、言わば黙示録の中の144,000人の民にしか聴くことの出来ない新しい歌なのであり、その為に必要不可欠な『未だ聴こえないものを聴こうとする意志』を育むことが私たちの儀式音楽の為の課題なのです。その為のアプローチを折りしも万博が行われている大阪の集会で試みることに少なからず意味があるでしょう。何故ならその努力は如何なる優秀な人工知能であろうとも成し得ることは不可能だからです。

講師プロフィール：

1984年ミュンヘン・オイリュトミー協会の招聘によりピアニストとして渡独。1987年よりキリスト者共同体ミュンヘン中央集会でオルガンを弾き始め1989年に同音楽責任者に任命される。それ以降合唱指導や作曲にも従事する傍ら名匠クラウス・シルデの下で研鑽を積む。1993年ロター・ロイプケの誘いを受けキリスト者共同体司祭・音楽家評議会のメンバーに加わる。以降M.チェーホフ演劇学校、シュトゥットガルト司祭養成大学、ミュンヘン教員養成セミナーなどの音楽講師も歴任。2022年秋にドイツで開催されたキリスト者共同体創立100周年世界大会の為に記念聖歌『アーメン』の作曲を委嘱される。2024年8月スイスのサンポー作曲賞受賞。